

タイ・バンコクにおける日本人駐在員家族女性の経験に関する研究

——生活実態と帰国後の変化を中心に——

末次由依

1 論文の目次

- ・ 第一章 はじめに
 - 1-1 本論文の背景と目的
 - 1-2 調査対象者
 - 1-3 本論文の構成
- ・ 第二章 先行研究の検討
 - 2-1 異文化適応と適応問題
 - 2-2 トランスナショナルな視点とジェンダー
- ・ 第三章 2000 年代タイの駐在員妻事情と変容
 - 3-1 日本人居住地区とコミュニティについて
- ・ 第四章 インタビュー結果
- ・ 第五章 インタビュー結果からの考察
- ・ 第六章 まとめ
- ・ 参考文献

2 はじめに

グローバル化の進展により、国境を越えて移動し異文化の中で生活する人々が増加している。これに伴い、移住や越境に関する研究が進んでいるが、従来は、移住を「一方向的な直線的移動」として捉える傾向が強く、移住過程が個人や家族に与える影響については十分に解明されていない。(吉原 2022:182)。そこで本研究では移住や越境の過程そのものに焦点を当てる。特に、移住者が異なる文化や社会にどのように適応し、新たな価値観や生活スタイルを実践していくのかについてみていきたい。

海外移住者の中でも夫の海外赴任に帯同する駐在員妻と子を対象とし、生活実態の解明と駐在生

活が帰国後のライフスタイルと自己の物事の認識の仕方や価値観に影響をどう及ぼすか(または及ぼさないか)を調査する。そこから、駐在という異文化生活を通じた移動と経験がもつ意味とは何かを考察する。

3 先行研究

日本人駐在員妻の「異文化適応」について、伊佐と叶の研究では、ネットワーク形成が重要であり、アイデンティティの変化が見られることが示されている。また、日本人コミュニティが適応を支える一方で、現地社会との接触が制限される可能性についても議論されている。(伊佐 2014; 叶 2018)

トランスナショナルな視点からは、山田が 1990 年代と 2000 年代の日本のグローバル化や経済状況の変化を背景に、駐在妻の意識や生活設計が現実的かつ自発的になっていることを明らかにしている(山田 2004)。これにより、グローバル化やトランスナショナルな動きがジェンダー意識や生活設計にどのような影響を与えたかが示されている。その結果、主婦としての規範と経済的自立を目指す自己の葛藤が生じており、駐在妻をトランスナショナルな存在として捉える重要性が述べられている。また、駐在生活の影響は一様ではなく、適応や行動、役割へのプレッシャーや姿勢にも個人差が見られるとされている。しかし、先行研究では帰国後の価値観やライフスタイルの変化に関する具体的な分析が十分ではなく、駐在妻の生活実態や日本社会との比較を通じた価値観の変化についての検討は限定的である。

4 調査概要

本研究は、日本企業が進出し、日本人駐在員が多い場所であるタイを調査地とした。筆者自身がタイのバンコクで駐在員の家族として生活した経験がある。調査協力者は9名である。インタビュー対象者は8名であり、その内訳は以下の通りである。夫の仕事に伴いタイへ駐在した配偶者:6名、駐在員の子供としてタイで生活した経験のある女性:2名。この2名のうち1名は母親も調査協力者である。もう1名はタイで現地採用として現在も働いている。加えて、質問紙調査をタイへ駐在した配偶者1名に実施した。

5 調査結果と考察

タイに駐在する日本人駐在妻は、「柔軟で自由な」生活スタイルに触れ、日本の価値観とは異なる文化に適応しつつ、自身や家族の生活を設計する中で価値観の変化を経験していることが分かった。先行研究で述べられる「帰国後の文化ショック」(伊佐 2014:102)とは異なり、タイでは日本社会を再評価し、改善点を具体的に挙げる傾向が見られる。また、ジェンダー役割や価値観に関して、山田(2004)が、1990年代のアメリカの駐在妻に見られる「アメリカ社会の中で自分の力で何とかしようとする姿勢」よりも、2000年代のアメリカ駐在妻にみられる「一時的な生活を楽しむ」という姿勢が強いことを示しているが、今回のタイの駐在妻の特徴としては後者と共通していることが明らかになった。

タイでは現地社会との関わりが限定的で、日本人コミュニティの支えが駐在妻の生活に大きく影響している。一方で、これが現地社会との接触を制限する要因にもなっている。駐在妻、子の生活は帰国後の価値観やライフスタイル、キャリア形成にも影響を及ぼしており、異文化適応を超えた長期的な影響が示唆された。また、アメリカや上海の駐

在妻との比較を通じ、タイにおける駐在生活の特徴や、女性たちの多様な適応プロセスが浮かび上がった。本研究を通じて、駐在妻という立場がいかにグローバル化や社会文化的背景と交錯しながら、新しい価値観や生き方を模索するきっかけとなるかが明らかになったといえる。先行研究においては、日本から帰国し数年たった後の駐在妻達の考えや生活実態の変化などを注目した研究は少なく、リアルタイムな生の声も非常に重要である。しかし、かつての駐在妻やその家族の視点とその後の人生にかかわる研究が今回のインタビューを通じて重要であり、帰国後直後や駐在中の意見とは異なる声を聴くことができた。

6 課題と展望

本研究は、2000年代初頭の駐在員妻に焦点をあてているが、調査協力者は限定されているため、当時のタイ全体の駐在員妻を代表するものではない。今後は、異なる時代や地域における駐在妻の比較研究や、駐在妻の周辺への影響について探索していくことにより、包括的な分析が求められるだろう。この知見を基に、「駐在員妻」という視角から、彼女たちの生活経験が日本社会や現地社会に与える影響についてさらに掘り下げることが期待される。

7 主要参考文献

- ・三浦優子, 2019, 『日本人エクスパトリエイト・コミュニティに関する社会学的実証研究——駐在員女性配偶者の日常生活実践の事例』, 立教大学大学院社会学研究科 2018 年度博士論文.
- ・山田礼子, 2004, 『「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて——アメリカ駐在夫人の意識変容』, 東信堂.
- ・吉原直樹, 2022, 『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』, ミネルヴァ書房.